様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３１４０３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2016
課題番号：２６８６１９６４

研究課題名（和文）下肢人工関節置換術を受けた高齢患者ヘルスプロモーション促進モデルの開発

研究課題名（英文）Develop an acceleration model of that health promotion after total knee and hip replacement　for elder persons

研究代表者
齋藤　貴子（Saito, Takako）

日本赤十字秋田看護大学・看護学部看護学科・講師

研究者番号：９０３５２５３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、下肢人工関節置換術後における高齢者を対象としたヘルスプロモーション促進モデルの開発を視座にヘルスプロモーションの特徴を明らかにすることを目的とした。これまで医療者はADL、QOL、歩容に注視しているが、高齢者にとっては「歩ける」ようになったことが主題であり、歩容に気遣っていないことが明らかとなった。高齢者は歩いているなかで歩く指標をもち、指標は歩ける実感となる。実感はこだわりを遂行する基盤となる。歩く、ADL、こだわりが分断せず相補的に関与し合う生活がヘルスプロモーションの特徴であることが明らかとなり、この特徴をもとにヘルスプロモーション促進モデルの試案を作成した。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study revealed characteristic of health promotion after total knee and hip replacement for elder people. Medical workers paid attention to activities of daily living, quality of health and gait. But participants didn’t pay attention gait, they paid attention to their ambulatory ability. Ambulatory ability became the subject for participants. Participants didn’t take care of their gait. Participants got some index thorough everyday walking. Participants had a sense of ambulatory ability everyday walking. Actual feeling for ambulatory ability made daily life formality. The characteristic of health promotion is involved with the walk, ADL and daily life formality each other complementary. I developed a proposal health promotion acceleration draft model for elder persons after total knee and hip replacement with this research achievement.

研究分野：看護

キーワード：高齢者運動器疾患　ヘルスプロモーション　人工関節置換術　現象学的看護研究

１．研究開始当初の背景

急速に進行している超高齢化の中で要介護の大きな要因として運動器疾患が挙げられる。移動動作に関わる下肢の運動機能を改善する最終的な治療として人工関節置換術がある。この下肢人工関節置換術を受けた後、運動機能のみならず生活全体の健全状態（well-being）を増大しようとする「ヘルスプロモーション」を重要な概念と捉え、ヘルスプロモーションの特徴をつかみ、促進する介入モデルがあれば、手術を受けた後健全状態を増大させ健康寿命に寄与できると考えた。ヘルスプロモーションはペンダーを参考に個人の特性と経験、行動に特異的な認識と感情、行動の成果によって構成されると仮定し、これらを明らかにすることで、「高齢者の下肢人工関節置換術後におけるヘルスプロモーションについての特徴」が描出されると考え、本研究に取り組んだ。

２．研究の目的

本研究の最終目標は、下肢人工関節置換術後における高齢者を対象としたヘルスプロモーションモデルの開発であるが、まずは下肢人工関節置換術ヘルスプロモーションの特徴を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

（１）研究デザイン　混合研究法のトライアンギュレーションデザイン。

（２）調査の実施方法　本研究への調査協力が得られた整形外科単科の病院を調査施設とした。調査施設の施設長と看護部長に対象者の選定を依頼し、7 名を調査対象とした。

対象者に対し、日本語版健康増進ライフスタイルプロフィール（HPLPⅡ）、日々の生活について自由に語ってもらう非構造化面接の調査を行った。面接の内容を対象者の許可を得て IC レコーダーに録音し、調査後トランススクリプトに逐語化した。

（３）分析方法　日本語版健康増進ライフスタイルプロフィール（HPLPⅡ）については、尺度が規定する下位尺度ごとに数値を集計し、先行研究と点数の比較を行った。日常の生活についての非構造化面接の語りは、現象学的看護研究を基軸に分析した。ヘルスプロモーションを構成している個人の特性と経験、行動に特異的な認識と感情、行動の成果が現出しているか、生活の中でいかように現れているかについて分析を行った。分析の過程では臨床実践の現象学研究会にて分析の示唆と確実性と真実性を確認した。

（４）倫理的配慮　対象者の選定は調査協力施設に依頼した。その際、看護管理者が対象者の選定に大きく関わっていたが、強制力が働かないように対象者へ依頼するよう施設側に要望した。対象者には、調査開始前に研究者が声をかけ調査協力意思の確認を行った。プライバシーの確保できる個室において、研究について調査協力は自由意思であること、途中辞退の保証、調査協力の可否が診療への影響を与えないこと、個人情報の守秘と匿名性の確保、データの保管方法と廃棄方法、盛夏公表の可能性について文書と口頭で説明し、調査協力の同意については同意書への署名で確認した。調査開始前に研究者の所属先の研究倫理審査委員会を受審し、承認（承認番号 26-036）を得てから調査開始した。調査協力施設とは調査協力の同意を書面にて確認し、調査協力施設では医学研究に関する倫理審査を受審し、承認を承諾書にて確認した。

４．研究成果

（１）日本語版健康増進ライフスタイルプロフィール（HPLPⅡ）の得点結果（表 1）

本研究で対象者 7 名の HPLPⅡの下位尺度

表　HPLPⅡ平均得点

	本研究	魏ら*	島**
健康の意識	2.37	2.0±0.6	2.35±0.47
精神的成長	2.90	2.4±0.6	2.51±0.54
身体活動	2.38	2.0±0.6	1.74±0.55
人間関係	3.00	2.6±0.5	2.95±0.46
栄養	2.84	2.6±0.6	2.90±0.35
ストレス管理	2.82	2.4±0.5	2.66±0.46
全体	2.68	2.3±0.5	2.53±0.35

*魏長年,米満弘之,原田幸一,宮北隆志,大森昭子,宮林達也,上田厚（2000）. 日本語版健康増進ライフスタイルプロフィール. 日本衛生学雑誌. 54. 597-606. ⇒対象者は大学夜間部学生、医療サービス職員、健康教室参加者 337 名。

**島明子（2004）. 非治療者を対象とした更年期症状と健康増進行動の関連性—日本語版健康増進ライフスタイルプロフィールを用いた検討—. 母性衛生. 45（2）. 269-277.　⇒146 名の回答者から外科的閉経とホルモン療法対象者をのぞいた 115 名が対象者。

ごとの平均得点は表 1 の通りである。特筆すべきは身体活動の平均得点が他の研究と比較して高いことにある。本研究の対象者は運動器の中でも人工関節置換術という侵襲の大きな手術を受け、術後自宅ないしは通院しながらリハビリテーションプログラムが課されADLを保ちさらに拡大を目指している。退院後の生活としては歩きにくさや膝折れの不安もある。そうしたなかで身体得点が高かったのは、歩けなかったのが TKA によって歩けるようになったことが最大の理由と推察される。精神的成長は後述するが、歩けるという身体活動が対象者が大事だと思う生活を営む基盤となり生活の営みに意味が生まれることで精神的成長に関与していると推察される。他の下位尺度や全体の平均得点を概観したところ、先行研究と遜色ない得点であり、TKA の術後康増進ライフスタイルプロフィールは保たれていると推察できる。

（2）日常のなかに歩く指標をもつ

TKA によって「歩ける」ようになったことで、対象者は日々歩いていた。対象者は歩くことはただ「歩ける」こととして語っていた。医療者がリハビリテーションプログラムを組み歩容のアセスメントをしているときには、歩容に注視し綺麗に歩くことに執心している。しかし医療者とは対照的に、整った歩容で歩くことに対象者は関心を寄せていなかった。日々の生活でこれくらいなら「歩ける」という歩行可能であり現実的な指標が作られ、歩ける指標をもとにこれくらいならできると生活の中で調整していた。そして指標があることで歩けている自分を自覚していた。

（3）歩ける生活はこだわりを遂行する基盤となる

歩ける生活は、毎日自分が決めた距離を歩きつづける行動や沢山の友人達と過ごす生活、気楽であり仏への信仰を遂行できる毎日、身まかないの幸せ、歩けるということが大事と対象者なり表現で生活についての所感が語られた。一般に日常生活は日々過ぎていき、記憶にとどまりにくい。TKA 術後である対象者は、歩ける指標をもち生活していることで歩ける自分や歩けていることそのものを実感し、大事と思う生活を営む骨組みとなる。こうした実感は尋ねられなければ日常とともに過ぎ去ってしまう。しかし本研究で研究者に問われることで想起され、言語を得て表現されたことで実感は実体化し、生活のこだわりとして語られた。大事と思える生活を営むことができている所感は、こだわりへとつながっていった。

医療者ははじめに大事だと思う生活や営みたい生活を聞き、そこから目標を設定する。しかし大事だと思う生活は、指標を持ち「歩ける」実感や生じた所感が積み重なりこだわりとなる。時間性が真逆である。医療者があらかじめ設定する目標ではなく、毎日生活を重ねていくことでの実感に焦点を当てていく必要性がある。

（4）埋め込まれた習慣や慣習が ADL を回復させる

高齢の特に女性は男性または他の年代と比して宗教性が高い(Imamura,2016)。本研究でも仏壇を拝む宗教的慣習が否応なく階段を昇らされることになり、日常に埋め込まれた宗教的慣習を行うことが ADL の回復につながっていた。

リハビリテーションをしたことにより、ADL が拡大していくのではなく、対象者が大切にしている日常の習慣や慣習を繰り返すことで付随して ADL が拡大していく様相がそこにはあった。

（5）歩ける実感の積み重ねが意味を帯び生活の未来予持へとつながる

TKA を受けたことによって、歩けなかった術前と比して歩けるようになり、歩けることを確認するように対象者は毎日毎日歩いていた。歩ける実感が日々積み重なっていくことで、歩くことで体重を減らす行動を遂行できていること、歩けることは大事と意味を帯びる。歩けていることによってできていることが意味を帯び、意味のある生活上の経験が増えていくことでこれから先の生活を見据える未来予持へとつながっていた。

（6）下肢人工関節置換術後ヘルスプロモーションの特徴

下肢人工関節置換術後は歩けなかった術前と比して「歩ける」ようになることが第一義である。医療者は ADL、QOL、歩容に注視し患者である高齢者の生活を捉えていく。しかしながら高齢者にとっては「歩ける」ようになったことが主題であり、歩いているなかで歩く指標をもつ。歩く指標は「歩ける」歩行可能な自らの身体状況を把握させ、「歩ける」実感が生じる。こうした実感を持ちなら歩くことを積み重ねていくと「歩ける」ことで患者が大事だと思う生活を営むことができ、こだわりを遂行する基盤となる。これは「歩ける」からこだわりを遂行できる一方の流れではない。日常の習慣やこだわりの慣習は生活に埋め込まれている。その習慣や慣習をしようとすることで補足的に ADL が拡大することになる。また歩くきっかけともなる。こだわりのある生活を遂行することで ADL が拡大する。こうして大切だと思うこだわりと歩くことの実感、ADL の拡大は相補的に関与し合っている。この歩く、ADL、こだわりが分断せず相補的に関与し合う生活がヘルスプロモーションの特徴である。

（7）下肢人工関節置換術後ヘルスプロモーション促進モデル（試案）

前述のことから TKA 後の健康増進ライフスタイルプロフィールと得点は低くなっておらず、健康増進行動ができていると判断される。さらに促進していくために以下の介入が試案できる。

①退院後の生活を営むなかで「指標」を見つける。医療者がリハビリテーションプログラムや ADL といった指標を設定するのではなく、高齢者が生活の中で目安にしている指標とする。

②指標をどのように遂行しているか、指標を伴って語られる行動を繰り返していることで高齢者のいかような自信となっているかを高齢者に語ってもらう。語ろうとするときに高齢者の大切にしていることや生活のこだわりが言葉として表現され、高齢者が自覚するきっかけとなる。

③普段の生活習慣や行っている活動を聞き、社会文化的背景から高齢者の生活にどの程度強制力を持っているかアセスメントする。強制力のある習慣や活動は、強い動機づけと

目標となりうる。
④①～③を通じて、高齢者にとっての意味や意義と生活の未来への連続性を確認する。フィードバックし、高齢者の反応から、高齢者個々のヘルスプロモーションが強化されているかを判断することができる。
　この①～⑥は試案に過ぎない。今後運動器にかかわる看護師へこの試案を示し、看護実践にいかように行かせるか、これまでの看護実践についてこの試案の立ち位置で振り返ったときにどのように評価していくのか、検証を進めたい。

５．主な発表論文等
〔学会発表〕（計　３　件）
①齋藤貴子「高齢女性の人工膝関節置換術後における期待とこだわり－歩ける日常経験から－」第 36 回日本看護科学学会学術集会（東京国際フォーラム（東京都中央区）、2016 年 12 月）
②齋藤貴子「膝の手術を受けた方にとっての日常と習慣的慣習のつながり」第 43 回日本保健医療社会学会大会（佛教大学二条キャンパス（京都府京都市）、2017 年 5 月）
③齋藤貴子「女性の世代による健康増進行動の違い－日本語版健康増進ライフスタイルプロフィールの得点から－」第 18 回日本赤十字看護学会（福岡県北九州市）、2017 年 6 月）

〔研究会発表〕（計　２　件）
①齋藤貴子「人工膝関節置換術を受け、日常生活のなかでの歩く経験」第 78 回臨床実践の現象学研究会（首都大学東京荒川キャンパス（東京都荒川区）、2016 年 4 月）
②齋藤貴子「人工膝関節置換術を受けた高齢女性の経験－手術を決断したときの語りを中心に－」第 85 回臨床実践の現象学研究会（大阪大学豊中キャンパス（大阪府豊中市）、2016 年 12 月）

〔その他〕
研修会講演講師
齋藤貴子「膝の手術を受けた方の日常生活経験（仮題）」平成 29 年度日本運動器看護学会地区研究会 in 仙台（仙台市情報・産業プラザ（宮城県仙台市）平成 29 年 9 月予定

６．研究組織
(1)研究代表者
齋藤　貴子（SAITO，Takako）
日本赤十字秋田看護大学・看護学部・講師
研究者番号：90352533